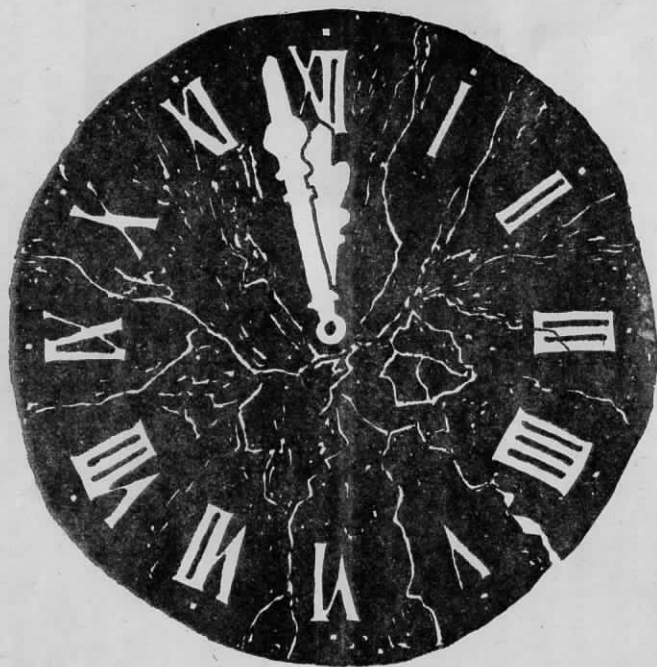


昭和47年8月15日発行・第33号（昭和45年9月4日第三種郵便物認可）

# リベルテール

8月号



Libertaire Vol. III, No. 9

無政府主義者の機関紙

昭和四十

リ

目次

△聖なるものVを奪還するために	小田光雄	1
有能なる漕ぎ手・島抜人 I 佐原喜三郎	菅輝生	5
神戸港湾の同志から	本多宏盛	6
新潟アナーキズム運動の一側面	山口健助	7
親殺し賛成	ハギシン	9
戦後の思い出	杉藤二郎	10
杉よ、眼の男よ	富岡誠	16



△聖なるものVを奪還するために

小田光雄

薔薇、胎児、欲望その他幽閉し  
 ことごとく夜の唄そびえたつ。 塚本邦雄  
 われわれは、何かを喪失した時代に生きている。われわれにとって現代とは、「そこにわたしの魂が揺すられる場所、そんな純粋な場所はすでに喪われてしまった」(埴谷雄高『不合理ゆえに吾信ず』)時代に他ならないのである。

思えば近代の歴史とは、喪失の歴史ではなかったであろうか。ルネッサンスの輝かしい日の出に始まる近代は表向きは、合理主義、啓蒙主義そして個の原理とまことにオプティミズムに満ちていた。十八世紀の産業革命以後は唯物主義も発達した、しかしこれらの近代的認識からははずれた思考は、非合理なものとして、狂気として葬むられる運命にあった。西洋においては、ニーチェによって告げられた神の死の宣言は、もはや当然のこととして受けとられ、日本においては、すでに日本的なるもの存在は終えんしてしまっただかのように思われる。ここにおいて人間は、かつては絶対的なるもの、永遠なるものとして意識されていたいわゆる神や日本的なるものを喪失することによって、根なし草的意識に目ざめたと

えるのではないだろうか、確かに文明も発達したし物質的にもかつてと比べて想像以上に豊かになった。しかしその代償に人間は何か重要なもの、もっと根源的に人間に必要なものを失ってしまったのである。人間とは、こうした神または日本的なるものでも良いけれど、何か絶対的なものを対置することによってしか己れを確認出来ない存在ではないだろうか、こうした近代的認識と反近代的情念の狭間でいち早く格闘を始めたのは、近代の文学者、思想家達であった。その衝動は、シュルリアリズム運動、ジョルジョ・パタイユ、ピエール・クロンウスキー、ミシェル・レリス達の「一聖性社会学研究会」に、日本においては戦前の日本浪漫派に如実にあらわれていると言えよう。

近代とは前にも述べた通り、前近代が所有していた神話(神及び日本的なるものの根源)を喪失してしまい、またかつては保たれていた精神(観念)と肉体(現実)の均衡が崩壊してしまった時代と言える。そうした喪失感に促された人々は、いわゆる回帰と言う形で失なわれたものを探求しなければならなかったのである。日本浪漫派の日本的なるものの探求、パタイユ達の神なき後の

聖なるものの追求、ドストエフスキの社会主義からスラブ主義への回帰も、カフカの迷宮世界もジョイスの冒険もすべて東洋も西洋も越えた一つの同じ精神の構図と言えるのではなからうか。そして、この近代を越えた聖なる世界を構築せんとしたのである。

だがここで留意しなければならないのは、バタイユ達も日本浪漫派の指導者保田与重郎またその後えいたる三島由紀夫にしても、彼らがすでに近代的自我にめざめていたと言うことである。近代的自我を所有しつつ、反近代なるものを志向せんとしたゆえに、彼らは、ドン・キホーテとならざるをえないしまたその心情はイロニカルなものであった。保田与重郎はその心情をイロニーと称し、こう言っている。

「破壊と建設を同じ瞬間に一つの母胎で確保する考え方」

この破壊と建設と言う言葉を、近代と反近代に置き換えてみるならば、彼の心情が如何に屈折していたかと言うことを、如実に示しているのである。

彼は喪失を自覚していたがゆえに、彼の態度としてはすでに虚構としての日本的なるものの存在をはるか彼方に想定し、正と反が絶えず衝突して、決して合の地点に達することがないと言う擬似弁証法でもって、情念の奥

としたのであった。バタイユ達の位置もそこにある。彼らは神なき世界に生きていた。だが神なき世代とは、喪失を実感として受けとめざるをえない世代なのであった。それゆえに彼らは、古代社会に目を向け、失われたものを発見しようとしたのであった。そして彼らは、古代社会におけるエロチズムを、供儀を、祝祭を現代に復権させようと試みたのであった。

近代とは、労働と生産の時代にほかならないが、この近代に反逆するために、バタイユは瞬間の、非生産的なエロチズム、供儀、祝祭の哲学を、エロスと死の神秘的体験を通して啓示したのであった。そしてかつては聖なるものの象徴であった神が、近代においていわゆる世俗的教会の体系の中で、ただ形骸化され、聖なる要素を失い、有用なものとしか存在しなくなったがゆえに、神を抹殺することによって、新たな神に変わるべき聖なるものを奪還するために、神を殺すと言う供儀を行ない、神なき後の聖なるものを希求したのであった。ここに、彼が神なき神学者と言われるゆえんがあるのである。

今までぼくは、保田与重郎やバタイユを取り上げ、近代の問題点として、失われたもの（あるいは聖なるもの）への回帰あるいは探求と言うことが、西洋も日本も越え

深くひそむ日本的なるものを探求せんとしたのである。太平洋戦争を鼓舞したと言われる悪名高き文学者達日本浪漫派の情念とは転向を契機として培われた一つの失われたものに対するノスタルジアではなかったのではないだろうか。保田与重郎の後になって出て来た天皇も、それは結局はそうした失われたものに対するノスタルジアの象徴としての虚構の天皇と言えるのではなからうか。これは確かに危険な意識であった、こうした彼らの飛翔は、政治的には戦争とファシズムと言う形をとってしまつたと言うことに彼らの悲劇があるのである。

西洋に目を転じてみれば、西洋においては近代の問題とは、まず神の不在であった、神によって一元化されていた思考は、ニーチェの神の死の宣言によって、すべて崩壊してしまつた。十九世紀の合理主義のまんえんは、文学史的に見るならば、合理主義への反発としてクラダンとかユイスマンに代表されるような象徴主義文学者によって、一種の世俗的なものを軽蔑、嘲笑し、自分の殻にとじこもり、いわゆる「アクセルの城」を構築せんとする思想を生み出していった。だが二十世紀の文学者達はそうした一種の現実逃避に終わるのではなく、近代が喪失してしまつた聖なるものを見つめ、それを発見しよう

た同じ情念の構図であると書いてきた。こうした彼らの衝動は一体何に起因しているのだろうか。失われた黄金時代への郷愁であろうか。それとも原始の祝祭か、あるいは時間を覚えずして遊び戯れた少年時への追憶なのだろうか。ぼくは、ここで宗教史学者ミルチャ・エリアーデの指摘を思い出さずにはいられない。彼によれば、古代の単純文化社会においては、神話に代表されるような一種の祖型があって、古代人は、その祖型を模倣し続けることによって社会がなりたつていたと言っているのである。勿論この社会においては、単純再生産であり農耕も性もありとあらゆるものが、祖型によって意味づけられ、その社会では、進歩と言う概念はなく、時間は存在せず永遠回帰であったのである。そして現代においても、社会は複雑化したのが、人間は意識下にそうした回帰願望を秘めているのだと。

こうした衝動とは絶対に合理主義の下で割り切れるものではない。こうした衝動を所有している人間にとって真理とか平和とかが、はたして人間の根源的なものとどれほど関わりあいがあるものであろうか、人間とは真理とか平和とかを希求するよりも、むしろ本質的には非合理的な方向に突き進むという衝動を心の奥深く秘めているのではなからうか。そうした非合理的なものをたとえ

ば、美とか悪とか、また如何に生くべきかと言うより如何に死すべきかと言うことが問題にならう。

そうしたことを証明するのに、人間が口では平和を唱えながら、歴史を見れば戦争の繰り返しであると言いつつ、ドイツ国民が国民投票でヒットラーを選んだこと、また日本浪漫派の影響下で、戦時下の若きインテリゲンチヤ達が如何に死すべきかという意識にめざめ、死んで行ったことは、非常に象徴的なのである。

バタイユ的観点から言えば、人間が蜂起し立ち上がるのは、マルクスの言う様に決して経済的貧困のゆえではなく、抑圧された情念が初めて人間に意識された時なのであると言えよう。ファシズムは、こうした人間の衝動に何か訴える要素を持っていたと言っても過言ではなからう。われわれが革命を志ざさんとするなら、こうした人間の危険な意識を認めずして、如何にして革命を語り得ようか。この際問題なのは、未来の社会が問題なのでなく、ただただ瞬間の、非生産的な情念の消費こそが最も重要なのである。

いわゆる革命とは、現代における原始の祝祭を復権せんとする試みでなくして何であるのだろうか、そしてこの瞬間こそ、失われた聖なる時間であり空間なのである。この中で人間は、エロスと死を含んだ失われた連続性を

回復し、エクスタシスを体験し、「恍惚の内光の中では主体||客体という二つの不可欠の端子は必ずたき尽くさなければならず、消滅しなければならぬ」(「バタイユ『有罪者』」)のである。

今こそわれわれは、暗黒の、苦痛の、錯乱の、供儀の、エロスの死の、まったくただ中に立って失われた聖なるものを、奪還しなければならぬ。今一度バタイユを引こう。「無限の喪失を梯子にして、われわれは存在の勝利を見出すのだ、存在に欠けていたものは、ただその消滅を願う運動と調子をそろえることだけだった。人事不省のテンポに乗せた恐ろしい舞踏に存在は自らを招待する。そして醜悪の調べ以外に知らぬわれわれは、それがあるがままに受け入れねばならぬ。勇気が挫けるときは、これにまさる責苦はない。また責苦の瞬間には決してこと欠かない。こと欠くならば、どうしてそれを克服できよう?。だが、警戒心なく一死に、責苦に、歓喜に向って開かれた存在、開かれ、死に瀕した、苦しく幸せな存在は、すでにおぼろな光明のうちに浴している。それは神々しい光である。そして、口をゆがめ、その存在が、空しく聞かせようとすると叫びこそは、無限の沈黙の中に消えて行く、大いなるハレルヤである。」(「マダム・エドワルド」序)